

御 挨拶

中 村 歌 右 衛 門

皆様、本日はお暑い中をお運び下さいまして誠に有難うございます。  
「葉月会」も今年は第七回を開催いたす事と成りました。是もひとえに皆様方の温かいご支援によりますものと深く感謝いたして居ります。

「葉月会」は、中堅、若手俳優の芸芸発表の場であると共に、歌舞伎邦楽若手の勉強発表も盛んに成って参りまして、誠に喜ばしい事と存じて居ります。

今回までに「どんどろ大師」「朝顔日記」「身売りのかさね」「東海道四谷怪談」そして昨夏は「女団七」を発表いたしました。今年は、義太夫狂言の異色作「志渡寺」を勉強いたします。演目としましては、いわゆる地味な部類に入りますが、なかなかの大作でございます。勉強の狂言としては取組みにふさわしい本格狂言でございます。出演一同の稽古熱心にめんどじでどうぞ、成果を見てやって下さいますようお願い申し上げます。

邦楽の勉強は、舞踊三題の発表をご覧いただきたく存じます。こういう機会に精一杯の演奏をお見せする若手の心を見て下されば幸せに存じます。

いずれにいたしましても、未熟者ぞろいではございますが、なにとぞ長い目で見てやって下さいますようお願い申し上げます。

尚、毎夏の開催にあたり、惜し身なくお力添え下さいます指導の諸先輩はじめ関係者各位、殊に国立劇場の皆さんには多大のご協力をいただき、本当に有難く、この機会に厚く御礼申し上げます。

(伝統歌舞伎保存会会長)

昭和六十三年八月

第七回 葉 月 会 国立劇場大劇場

歌舞伎青年俳優 研究発表会  
歌舞伎邦楽若手

一 操り三番叟 長唄囃子連中  
藤間勘五郎振付

二 本朝廿四孝 竹本連中  
尾上菊之丞指導

奥庭狐火の場

三 お 祭 り 清元連中  
藤間勘十郎振付

四 花上野誉碑 一幕  
戸部銀 作補綴  
金刀比羅 利生記

志渡寺の場 竹本連中

昭和六十三年八月十日(水)

昼ノ部 十二時三十分  
夜ノ部 五時 開演

主催 国立伝統歌舞伎保存会  
後援 国立劇場

加賀屋 歌 江	神田 和 幸
澤 村 藤 申	久保 清 二
尾上 梅之助	小柴 俊 哉
中村 蝶十郎	小島 孝 文
中村 京 蔵	近藤 孝 弦
坂東 玉 雪	柴山 二 美 雄
中村 吉 次	鈴木 俊 之
尾上 辰 夫	田村 俊 晴
片岡 松之助	手島 和 也 貴
山崎 権 一	三宅 貴
松本 幸右衛門	(第九期歌舞伎俳優研修生)
加賀屋 歌 蔵	川瀬 白 秋 社 中
中村 時 蝶	清 元 連 中
尾上 菊十郎	芳村 五郎 治
関 六 合	田中 傳左衛門
	演技指導 中村 梅 花

藤間 勘五郎 振付

# 操り三番叟

長唄囃子連中

翁	幸右衛門
千歳	藤車
後見	京蔵
付後見	柴山二美雄
三番叟	辰夫

二上りへ天照らす 春の日影も豊かにて合指手引手の一さしは  
 昔時を今に式三番 ありし姿をかり衣に 竹田が作の出立榮  
 合へとうとうたらりたらりら、たらりあがり ららりどう  
 とうとうは鼓の音、たらりたらりらは笛の譜といわれていま  
 す。この音調で舞台はいっぺんに「三番叟」のムードに包ま  
 れます。

翁・千歳のあと三番目に舞う三番叟を糸操りの人形で演じる  
 趣向は古格で新鮮、箱の中から出された三番叟が後見に操ら  
 れて舞う場面は踊り手も見も息をのむおもしろさです。  
 芝居に踊りに活躍の尾上辰夫が師藤間勘五郎の指導をうけて  
 みっちり稽古をつみました。

後見の京蔵と息の合った踊りをたっふりとご覧下さい。  
 翁に実力の幸右衛門、美しい男舞いの千歳を藤車が勤めます。

真心が主題となっていますが、白狐の出から諏訪法性の兜、  
 焼耐火など古怪な趣向も見もので、女形が一度は勉強しなけ  
 ればならない古典舞踊の代表作です。  
 莊重な重厚味と、流麗な踊りの連続を八重垣姫に化体してど  
 こまで勉強できたか期待の舞台です。  
 梅之助は昨夏にも引きつづき尾上菊之丞師のくんとうを受け  
 て、生懸命に汗を流しました。  
 力者には坂東玉雪、そして、研修生出身の田村俊晴が抜てき  
 されました。

藤間 勘十郎 振付

# お祭り

芸者歌江

若	神田和幸
同	小柴俊哉
同	小島孝文
同	鈴木俊之

本曲は、「式三番」から生まれた各種「三番叟」の一ツで、本題は  
 「柳糸引御攝」、作曲者は五世柁屋弥十郎と伝えられ、鳥羽屋  
 里長社中の演奏です。

尾上菊之丞 指導

# 本朝廿四孝

奥庭狐火の場

息女八重垣姫	梅之助
力者	玉雪
同	田村俊晴
狐	京蔵

浄瑠璃	竹本清太夫
	竹本泉太夫
三味線	竹本東太夫
	鶴澤正一郎
	鶴澤泰二郎
	豊澤浩樹

近松半二作「本朝廿四孝」の中から「狐火」として独立した義太  
 夫浄瑠璃の傑作。夫の勝頼の危急を救いたい八重垣姫の女の

浄瑠璃	清元榮志太夫
	清元志寿子太夫
	清元美好太夫
	清元美弥太夫
三味線	清元美治郎
	清元勝三郎
上調子	清元邦寿

へさるとりの 花も盛りの暑さにも 負けぬ気性の見かけから、  
 おなじみ 清元の申酉。場内は江戸前のお祭り気分。色。  
 中央の大ゼリにのって歌江の芸者が登場して始まります。

へいはずと知れしお祭りの なりもすつかりそこらじゅう ゆ  
 き届かせてこぶもなく ここではひとつ あそこでは……と、  
 ほろ酔い気嫌の踊りが続きます。

赤坂は日枝神社、山王祭の行列の先頭が、猿と鶏の山車なの  
 で、別名「申酉の祭」といわれ、清元の語りだしになっています。  
 毎夏振付をみて下さる藤間勘十郎師の許へ早くから稽古に通  
 った歌江の舞台をお楽しみ下さい。  
 祭りの若い者四人に、今年卒業した研修生がえらばれました。

志渡寺の場

森口源太左衛門	幸右衛門
樋谷内記	松之助
同妻菅の谷	藤一車
方丈了然	権次
内記門弟数馬	国次
同十蔵	吉次
森口門弟団右衛門	辰次
同伴之進	蝶十郎
中	小島孝文
同宿頼念	小柴俊哉
同雲念	手島和也
同西念	久保清二
同真念	柴山二美雄
同腰元信夫	近藤弦
同民谷坊太郎	梅之助
同乳母お辻	関六合
	歌江
	浄瑠璃
	竹本葵太夫
	竹本東太夫
	豊澤瑩緑
	豊澤浩樹

幕のあくまで

讃岐丸亀の牛駒藩では、御前試合に勝った者が鎌倉の將軍家に推挙されることになっていました。民谷源八も森口源太左衛門と試合をする事になっていましたが、その試合の前に何者かによって殺されてしまいました。源太左衛門のしわざらしいVという事はわかっていても何も証拠がないので、どうすることもできませんでした。それから数年が経ちました。源八の忘れがたみ民谷坊太郎は母と別れて、志渡寺に預けられ、六才になりました。今度は、家臣樋谷内記が源太左衛門と試合をする事になったのです。

開幕

舞台装置

本舞台、正面高二重。下手、まわり縁つき出入り、後ろ襖。上手一間 塗骨障子屋台、志渡寺の書院の体。

あらすじ

今日は、その大事な試合の日です。卑きような源太左衛門は、またわるだくみをして、古例の神酒に毒を入れ、内記に飲ませてしまいました。ふしぎなことに、試合が始まると、内記の五体はワナワナとふるえがとまらず、苦もなく打込まれてしまいました。

あつけなく試合は終り、遺恨をのこさないよう方丈了然のはからいで、酒宴が設けられました。その席に坊太郎も侍りました。『小僧、酌をいたせ。』

と源太左衛門は威張って盃をだしましたが、坊太郎は、内記に酌をして、あとはキョロリと脇を向いてしまいました。短気な源太左衛門は、火の様になって怒り、首筋をつかむや引きずりすえようとしました。あがらう坊太郎。そうこう争うはずみに、袂からコロコロと二ツ三ツ桃がころがりおちました。

「あッ。」  
内記も方丈もひと目みて、まっさおになりました。それは志渡寺の中にある大切な桃の実で、殿様に差し上げぬ中は誰一人、食うことのならぬおきてになっていたのでした。坊太郎はいつのまにか、それを盗みとっていたのでした。この場の危難を救ったのは、方丈了然のはからいと、かけつけた乳母お辻の必死の嘆願でした。源太左衛門も、方丈のとりなしを立てて、席をけって帰ってゆきました。

あとには、お辻と坊太郎が残りました。お辻は身をふるわせて盗みをなげきしましたが、何を思ったか坊太郎は、白紗の上に字を書き始めました、生まれもつかぬ啞のため、坊太郎は口がきけないのです。『桃を盗んだのは、乳母が病気で他に食べられないゆえ、も

し死なれたら悲しくて、それで盗んできた。もういたしませぬから、かんにんしてくれ。』  
みなまで読めずに、お辻はハッと泣き倒れました。あわれであわれでなりません。それでも、ふと、心をとりなおすと、かねて用意の懐剣をスラリと抜くや、われとわが胸にガバと突きさしました。  
『さ、物を云わっしゃれ。南無金刀比羅大権現さま。物を云って下され。』  
と叫びました。  
けれども、坊太郎は乳母の顔を見守るだけで、やはり物は云えませんでした。あ、これほどまでにしても神や仏の助けはないものか。  
そのとき、一ト間のうちから、爽やかな声がかこえてきました。それは樋谷内記の声でした。  
『やあ、坊太郎。今こそゆるすいとまごい。乳母が冥土の餞別に、引導せよ。』  
と内記がいいますと、坊太郎は小さい手を合せ、  
『南無阿弥陀佛。』  
とハッキリとなえるのでした。  
『やあ、そんなら物が云われるのか。』  
とお辻は、喜びの涙にくれました。  
源太左衛門を油断させるため、方丈のはからいでにせ啞といつわり、夜は内記の許へ通って剣術の稽古をしていたのです。お辻にはすべてがわかりました。今は、りりしく本心をあかす坊太郎にみとられながら、お辻は静かに目を閉じるのでした。

# 『志渡寺』

## Q & A

### 質問と回答

Q 志渡寺は四国の

どの辺にあるのですか？

A 実際のお寺の名前は、志度寺しんどじ、と書くようで、香川県、高松市の東側に位置します。

今年ブームに湧いている瀬戸大橋は坂出しきかいで、四国側の入口ですが、これは高松の西側、海岸ぞいに丸亀もありません。

高松市内から、車で三十分程南下すると志度湾にでます。この港町が志度町。

お寺はこの静かな港町の一隅にあります。

た船が志度の浦で沈み、あきらめきれない、不比等を救わんと海女が海底の竜神と闘い、自ら乳房を切り開いて玉をかくし、奪い返した話です。

Q 能の「海女」ですね

A そうです。芝居では「志渡浦海人玉取」に脚色されています。

このほか、平家が四国へ落ちのびた最後の戦いが「志度浦の戦い」とよばれています。

お寺は推古天皇の時代に創建されていたといわれていますので、なかなか縁起の多いお寺です。

Q 葉月会の最初の演し物も「どんどろ」でしたから、四国には縁がありますね。

A そうですね。傾城阿波の鳴戸の「どんどろ大師」の場を上演したのは、第二回葉月会で、もう五年になります。

「どんどろ」は、今の徳島市、高徳本線で志度から更に南下したところです。

Q ところで、題名の「花上野誉碑」はなのうえのほ

まれのいしぶみ」の、上野と、四国とどういう関係になるのですか？

A 簡単にいいますと、仇討ちの認可を貰うため、坊太郎は江戸に上るので

段で、「志渡寺」はその四段目なのです。

文楽の方でも、この四段目は傑作と評判で「志渡寺」が代名詞になった位です。これを本格的に劇化した歌舞伎の舞台は、安政二年の河原崎座で、一幕の独立した舞台となりました。

その後、明治以降、五代目歌右衛門、先代梅幸とそうそうたる名優がみな手がけておりますが、決定打、という舞台がなかったことも事実です。

戦後、三代目中村時蔵が昭和二十七年一月に上演して懐しがりましたが、なんとといっても、当代の歌右衛門さんが昭和三十九年五月の歌舞伎座で上演したのが評判となりました。

今の勘九郎さんが、坊太郎をつとめたのですから、もう二十五年も前のことになりました。このとき、歌右衛門さんが、戸部銀作氏(劇作家)、野沢松之輔さんらのスタッフと会議を続けて再制作した本が、今回の上演台本です。

最近の観光旅行ブームは、ちよつと出遅れておりました四国に及び、静かだった志度町を訪れる人々も増え、デートパートも建ち、これからの目玉になりそうです。有名な「こんぴらさま」は、反対の西側で、この志度寺も霊場八十六番の札所になっております。

Q 「海女の玉取り物語」で有名な、志度ノ浦ですか？

A そう。やはり志度寺に伝わる伝説で、藤原の不比等(ふひと)に贈られた面向不背の珠の三宝をのせ

が、三代將軍家光のとき、間に入った柳生宗冬のおかげで許可されます。

このあたりがこの講談の面白いところで、スケールも大きい。早速四国に戻って本懐をとげるわけです。

そのあと再び江戸に上り、武芸の誉たかく諸大名から仕官の話も多かったのをどういうわけか固く断りつづけて武芸の指南ひとすじにつとめ、上野の観成院という寺で病没しました。

この観成院の碑を明治三十六年に上野桜木町の青竜寺という寺に移して長くその誉をたたえ残したのですが、上野公園の文化施設拡大の際にその青竜寺もなくなり、東京ではもう見られなくなったわけです。

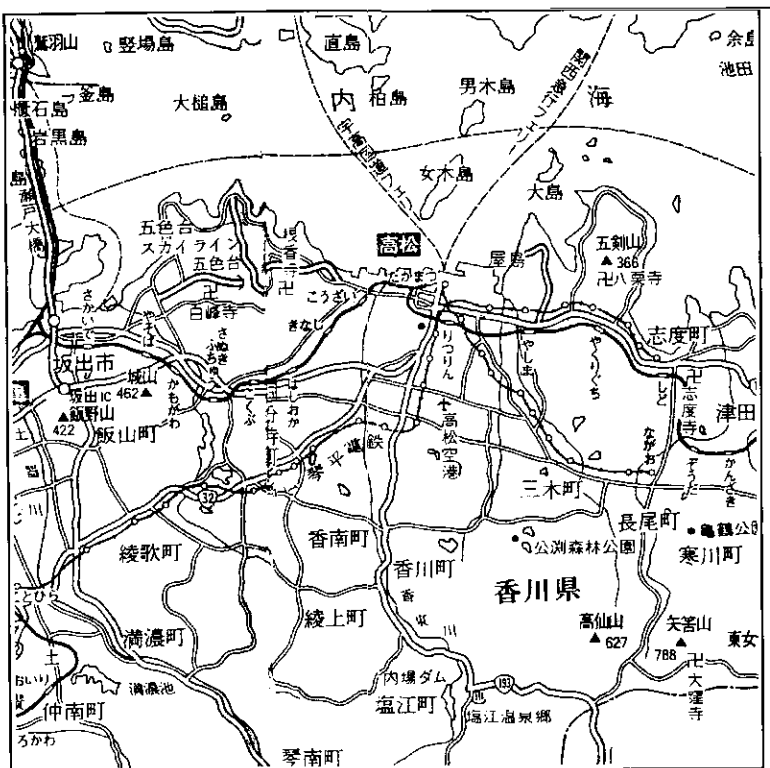
Q そういうくだりは、お芝居にないのですか？

A 歌舞伎には、この「志渡寺」しかありませんが、操り人形浄瑠璃が、全十段で、この仇討ちものを上演しております。

これが、今日の文楽に伝わっている「志渡寺」で、これをご縁に今度は、文楽上演の全通しを見是非ご覧下さい。

Q 葉月会の「志渡寺」は、文楽と同じ、と考えていいのですか？

A 詳しく申しますと、天明八年、人形浄瑠璃の上演が全十





「夏姿女団七」 柳橋草加屋の場  
中老六浦  
お梶=歌江 実ハおとら婆=延寿  
琴浦=梅之助 森下甚内=権一



「夏姿女団七」 両国錨床の場  
お梶=歌江



「夏姿女団七」 浜町河岸の場  
お梶=歌江 おとら婆=延寿

年に一回、八月に研修  
発表をする「葉月会」は、  
昨夏の第六回で「夏姿女  
団七」三幕を上演、加えて  
舞踊「浅妻舟」「夕立」「鷺  
娘」を発表いたしました。

ご覧の皆様には思い出  
のアルバムとして、お越  
しになれなかった皆様の  
ために、舞台写真をここ  
にお目にかけます。

思い出の舞台  
昨年の舞台から  
第六回  
葉月会  
思い出の舞台

(撮影 石井雅子)



「浅妻舟」  
白拍子浅香=梅之助



「夕立」  
七之助=勘之丞  
多喜川=歌江



「鷺娘」  
鷺娘=歌江

＝ 葉月会七周年記念 ＝  
誌上特別企画

見たいー 傑作狂言集  
ー発表したい

口上

「どんどろ大師」の発表以来、回を重ねる毎に葉月会の上演歴史も積み重なってまいりました。  
「朝顔日記」「身売りのかさね」「四谷怪談」「女団七」と続き今回の「志渡寺」で第七回となりました。  
さて、第八回を迎える来年以降、葉月会の企画は？  
出演の俳優はもちろん、多くのファン待望の名狂言を夢にのせて、「ユニークな企画に進んで挑戦」をテーマに、特別発表をいたします。  
ご覧の上感想をおきかせ下さい。

切られお富

若葉梅浮名横櫛  
河竹黙阿弥作

四世源之助・二世時蔵が得意とした世話物。  
お富と与三郎の再会からはじまり、今度はお富のユスリの名場面。

酒屋

艶姿女舞衣  
竹本三郎兵衛作

おなじみの時代世話狂言の名作。  
歌江のお園を見たいという声も高い。  
じみながら本格義太夫狂言を、実力を持った葉月会のメンバーで。

乳母争い

那須与一西海硯  
並木宗輔作

昭和二十四年十二月の東劇で三世時蔵が戦後初上演。  
那須与一出陣のみぎり、男子二人の乳母が争って初陣のさきがけに  
身命を呈する。篠原——照葉の女の闘い。

うわばみお由

蟒於由曙評仇討  
三世 瀬川如 皐作

四世源之助の得意のだし物。  
長編大作で、多くの登場人物を要するため、文字通りユメの企画である——而し、葉月会では是非実現させたい代表作。

牡丹燈籠

怪異談牡丹燈籠  
三世 河竹新 七作

人気狂言の中でも有名な「お露新三郎」の悲恋物語りは、芝居の味たっぷりの本格怪談。伴蔵・お峯の配役と共にユメの長編大作。  
アレンジしてご覧頂きたい夏狂言の傑作。

鶺鴒の勘作

日蓮上人御法海  
並木宗 輔作

日蓮上人記的一幕。東横ホールの茶会公演で中村歌右衛門が上演した。甲州石和(いさわ)の伝説に因む鶺鴒の物語りで勉強したい浄るり世話狂言。

(上演希望をハガキでお寄せ下さい。又この他に企画をお持ちの方はご投稿下さい。)

〔宛先〕 〒102 千代田区隼町四一 国立劇場内

伝統歌舞伎保存会

葉月会宛

歌 江さん

代々の名優が手がけてきた「志渡寺」のお辻は女形の大役。十日の上演を前に歌江さんは虎の門にある金刀比羅宮(ことひらぐう)に昇殿参拝した。案内の宮司さんから大広間で一人お祓いをうけて感激、お辻の念力にあやかって公演が無事に終るよう祈願した。

幸右衛門さん

二十六年ぶりの大阪上演という「四谷怪談」(中座)で伊藤喜兵衛を演じて奨励賞に輝いた幸右衛門さんは、久しぶりの葉月会出演。大敵(おおがたき)とも云うべき源太左衛門に出演する。本公演では仁左衛門さんが演じた重い役である。

先年、四国のこんぴら歌舞伎で演じた富岡後室の大役が好評。今回の「志渡寺」といい、どこか「こんぴらさま」にご縁があり、今度は後室菅の谷の好演がのぞまれる――。

権 一さん

河原崎権十郎一門の立役。昨夏は「女団七」の森下甚内に出演した。「志渡寺」では、方丈了然を勤め、大敵(おおがたき)の源太左衛門をたしなめる「位」の役どころ、楽しみな配役の一人。このあと歌舞伎会の「千本桜・すしや」で持役の弥左衛門を勤める。

松之助さん

第三回葉月会の「朝顔日記」で岩代多喜太を勤めて以来二度目の出演。

第7回

楽屋通信

葉月会

六月には扇雀一行がカナダへ、七月には歌右衛門一行がオーストラリアへ。海外公演さかな今年。それでも勉強会の夏は「葉月会」ではじまります。吉例により、歌江さんはじめ、おもなメンバーの近況情報をどうぞ――。

藤 車さん

葉月会は、初めての出演で澤村藤十郎一門。芝居通は前名の坂東佳秀でご存知の筈である。昭和四十二年名題昇通、五十四年から現在の藤車を名乗った。

梅之助さん

片岡孝夫一門。今回は榎谷内記を演ずる。本公演では羽左衛門さんが演じた重い役で前半は「辛抱」、後段でさつそうとした「捌き役」となる。仕どころ多い興趣の役である。ファン期待の舞台である。

「狐火」の八重垣姫は一度は踏みたい女形の大役。しっかりと勉強しなさい」と師匠の梅幸さんから力づけられて決心、指導の菊之丞師のもとへその日にとんでいった。兄弟子の菊十郎さんが力者のタテを担当。音羽屋のチーム力が背景だ。「藤娘」「汐汲」「浅妻舟」と長唄地の踊りが続いたあと、竹本浄瑠璃の「狐火」、注目の一ト幕である。竹本の指揮は鶴澤正一郎さん。

辰 夫さん

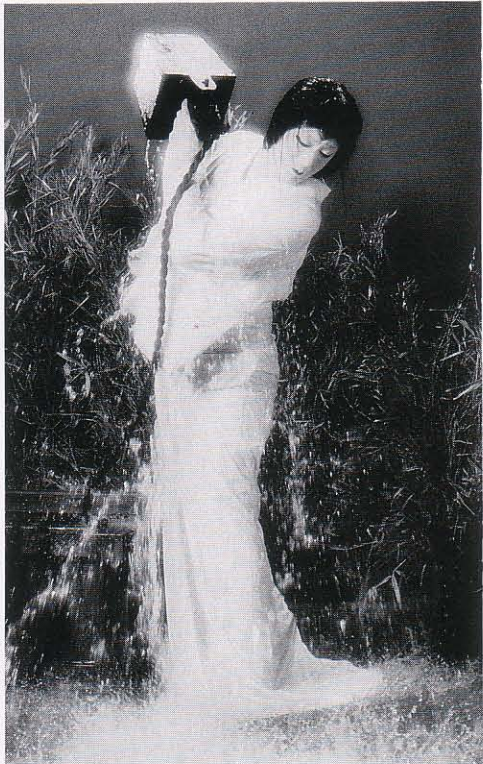
若き師匠尾上辰之助さんの急逝に会い、何か決意があったのであろう

関 六合くん

う、辰夫さんの姿勢に一層のものが加わった。「三番叟」の指導にあたった藤間勘五郎師は、その姿勢を褒める。期待のトップバッターである。葉月会のあと、今夏は歌舞伎会で大役「すしや」の権太を勤める。歌舞伎座百年祭の「寺子屋」で菅秀才を勤めた舞台をかわれて坊太郎に。六合は本名で「りくごう」と読む。昭和三十九年五月の歌舞伎座で歌右衛門上演の時の坊太郎は子役時代の勸九郎さん、三世時蔵の時は現吉右衛門の万之助が勤めた。六合君の坊太郎に声援しきりである。

歌江お辻の意気みせる

ポスター撮影に大入願う



「志渡寺」の上演にさきだち、宣伝用ポスターの撮影が六月八日、二時から行われた。

特設スタジオが国立劇場の地下一階に出現。舞台課と金井大道具さんらの協力で古井戸、しば垣も舞台そのまま、本水(ほんみず)使用のシヤッターが次々にきられていった。

歌江さんはお辻「水ごり」のこしらえて井戸わきに立ち、青木信二カメラマンのキツカケを合図に手桶の水をザンブリとかぶる。

梅雨入り前とは云え、十八杯目の水をかぶるころには、さすがに足先も冷えきったが、本水の威力はさすがで、写真のような、迫力あるポスター写真が出来上った。

舞台そのままの水ごり、こんぴら大権現さま、大入りをねがう歌江お辻の意欲をみせたスチール撮りであった。

										鳴物		三味線						長唄												
										田中傳太郎	望月太門丸	梅屋福丸	田中長九郎	田中長三郎	川中傳四郎	田中勸四郎	田中長十郎	松屋寿三郎	杵屋榮八郎	松島庄六郎	杵屋五七郎	杵屋源次郎	松島庄丸	鳥羽里一郎	松島庄吾	松永鉄次郎	芳村伊十佐久			
												三味線		浄瑠璃		三味線		浄瑠璃												
										小林露秋	高橋翠秋	川瀬白秋	清元邦寿	清元勝三郎	清元美治郎	清元美治郎	清元美治郎	清元美治郎	清元美治郎	清元美治郎	清元志寿子太夫	清元榮志太夫	豊澤浩樹	鶴澤泰二郎	鶴澤正一郎	豊澤榮緑	竹本東太夫	竹本泉太夫	竹本葵太夫	竹本清太夫
										河内屋着肉店	藤浪小道具	東京鴨治床山(株)	小林演劇かつら(株)	日本演劇衣裳	舞台監督持田	音響浦野澄	照明富田修	美術碓山喬	スタッフ	立師加賀屋歌藏	つけ打沖田昭彦	頭取葛山鹿之助	狂言作者竹柴吉松							

発行 昭和63年8月10日  
〒102 千代田区車町4-1-1 国立劇場  
社団法人 伝統歌舞伎保存会  
事務局 成島和男  
(265)7411番  
印刷 ハイビネス